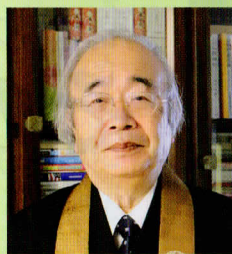


大乘

# DAIJO 法話

## 春を求めて



勸学  
おおた りしょう  
大田 利生

ここに一つの漢詩があります。題して「探春」  
といいます。

尽日尋春不見春（尽日春を尋ねて春を見ず）

杖藜踏破幾重雲（杖藜踏み破る幾重の雲）

归来試把梅梢看（帰り来りて試みに梅梢を把つて見れば）  
春在枝頭已十分（春は枝頭に在りて已に十分）

一日中、春を訪ねて歩いたが、どこにも見る  
ことはできなかった。杖について幾重にもかさ  
なる雲を踏みわけたがやはり無駄であった。帰

って庭の梅の枝をとつてみると蕾がふくらんで  
いたので、春の訪れに気づいた。こんな情景を  
詠んだものです。

この話の中に二つのことが思われます。一つ  
は、春が来た、春が来たといえ、探し求めた  
くなるのでしょうか。しかし、春に触れたり、  
春そのものを見ることはできません。花を見、  
鳥の声によって気づくということでしょう。あ  
るいは、自然に眼に入り、耳に聞こえてくると  
いうべきかもしれません。よく知られた歌に

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音に  
ぞおどろかれぬる」という一首があります。春  
と秋の季節の違いはありますが、この歌も秋を  
見ているわけではありません。コトコトと音を立  
てる風に秋の訪れを感じているのです。視覚に  
たよったり、あてにするのではなく、聴覚をも  
って体で感じていく、そこに自然と触れる世界  
が開けていくということです。

現代は、視覚の文化になっていると言われま  
す。声を聞きながら話をしているのではなくて、  
文字を見て対話をしていると言えます。授業の  
風景も聞く授業から見るかたちへと変わってき  
た、そうおっしゃる先生もおられました。

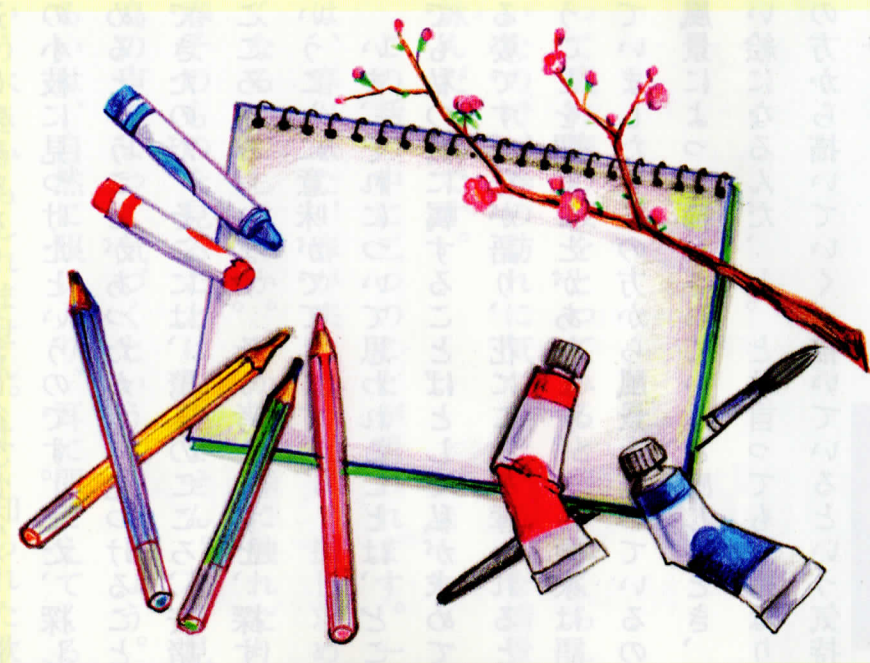
さらに、もう一つ思われることは、遠い、近  
いということばです。先にかかげた詩は、春を

遠くに求めながら、それは徒労におわり、近く  
の小枝に見つけたというのです。また、探し求  
めるということがあったから、見つけることが  
できたのだ。そこには、驚きのころ、安堵の  
ころがみられます。そう考えますと、探すとい  
うことに意味がでてきます。

いま、それについて思われることは、どこま  
でも私の側に属することばとして私が求めている  
姿です。花が語り、花にこころ奪われるとい  
うことを聞くことがあります。ある画家は語っ  
ていました。私の方から風景を描いているのに、  
風景によって描かされていると感じるとき、い  
い絵になるんだ、と。とは言っても、やはり私  
の方から描いていく、描いているという気持ち  
はなかなか抜け切れません。



この漢詩にみられる遠い、近いということは、『枕草子』のことばを思い出させます。とくに、遠くて近いものは、舟の旅、人の仲、極樂があげられます。岬から眼前の岬へ歩いて行けば、遠回りをしなければなりません。舟であれば、すぐに行くことができます。また、極樂浄土については、『阿弥陀経』に「十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極樂といふ」（註釈版聖典121頁）とあり、『無量寿経』にも同様に説かれていきます。ところが、『観無量寿経』では「此を去ること遠からず」（同91頁）と説き示されています。たしかに、矛盾した表現です。ただ、遠いといってもありがたい、近いといってもありがたい。そして『観無量寿経』ほど難しい経典はないが、こんな味わい深い経典もほか



カット 長井多美栄

にはない、と言った先輩がおられます。極樂浄土、すなわち、さとりの世界はそのようにしか表し得ないということです。

浄土が近いということは、仏さまの側からいえばその光は常に私を照らし続け、私はその光に浴し、仏に育てられ、生かされているということです。そのことに気づかせていただくのです。それには聞いていく以外に道はありません。では何を聞くのでしょうか。それは如来の本願です。阿弥陀如来の本願は、われを信じ、わが名を称えよ必ず救うという誓いでありました。その願いが願いどおりに名号となつて私のところに届いてくださっているのがお念仏です。常に私に寄りそってくださる仏さま、最も近いところにおられるのです。遠いというのは如

来の智慧を、近いというのは、慈悲をあらわします。智慧と慈悲の阿弥陀仏と申します。もちろん、智慧と慈悲が本来別にあるということではありません。智慧にもとづかない慈悲はありまません。また、慈悲をとまなわないような智慧もないのです。だから本来一つなのです。このような意味からも、遠いといっても、近いといってもありがたいということばとなつて出てくるのでしょうか。

日常生活のなかでも、聞くということが見るということに圧倒されそうです。それにはさまざまな要因があるでしょうが、ともかく聞くことの意義をとりもどしたいものです。そのことが、仏さまのおこころを聞いていくことにつながると思うからです。